



心の歌を奏で て

—仮面の国—
①中の②

芳田尚哉

翌日からは、午前中は部屋で作業をして、昼過ぎに店に向かう。

初日にわかった事だが、この横町の店は、ほとんどが昼過ぎに開き出す。そして、日が暮れると閉めてしまう。営業時間が極端に短い。

制作作業をしたい人たちの集まりだからしょうがないだろう。

その時間を周知しているのか、他の場所から横町にやってくる人も、その時間に来る。そして、お目当てのものを探して、色々と店をまわっているようだ。

俺としては、ひたすらマスコット作りだ。キヨカは暇そうに店番をしている。午前中だけでとりあえず二つから三つ作れる。そして、午後からで四つか五つ。このペースで作り続ければ、一〜二週間くらいで材料を使いきりそうだな。

それだけ作れば充分だろうけど。

五日ほど経ったが、客もほどほどに来てくれている。どうも、あの金狼(きんろう)の仮面の人の紹介らしい。あの人が、画廊(がろう)の前に飾ってくれているらしく、画廊を訪れた人がマスコットについて訊き、この店を紹介してくれているみたいだ。

それを知り、キヨカはお礼を言い画廊に足を運んでいる。お土産として、ちょっと大きめのマスコットを持って行っている。それも喜んでもらえたようで、画廊のいい場所に飾ってくれているようだ。

最初の客があの人でよかった。影響力があるのか、宣伝力があるのか、どちらにせよあのひとのお蔭で成り立っているようなものだ。

ただ、誰もがこの店に来て、俺が作っているのを知ると驚くのはどうなんだろうな。気にしなければいいだけなのだが、どうも毎回言われるとさすがにそれはできない。気にするなというのは難しい。

どうやら、キヨカが言うには、別に手芸作品だから……というわけではないらしく、この横町には女の人の方が多いらしいのだ。もちろん、男の芸術家もいるのだが、数が少ないらしい。なので、男の俺が作ったとは思わないらしい。それだけなのだが、俺の今までの感覚からすると、なかなか受け入れられないんだよな。

もちろん、この特技というか趣味というか、恥ずかしいわけじゃない。手芸が得意な男のなにが悪いのか。

そう思ってるくせに、言われると気にするんだよな。

さて、売り上げはといえば、爆発的に売れるという事はなく、一日に三個売れば多いといったところか。一日に一個売れるか売れないか、という程度だ。

それでも、こんな風に営業しているにしては売れているんじゃないだろうか。

他の店に比べて、単価が低いつてもあるんだろうけど。

ただ、生活必需品ってわけじゃなく、完全に嗜好品(しこうひん)だから、それを考えるといい感じなのかな。

俺としては、予想以上に売れている。まさか、売れるとは思ってなかったからな。

世の中、どんなものが売れるかわからないものだな。

そう思うと、元の世界で、今まで色んな店で、色んなものを見てきたが、こんなものがあるんだ……って思う事が、何回もあったな……。

スパイスとか、保存食は食品だから売れるとは思ってたけど、こういうのも結構売れるものなんだな。

国によっては、そもそもこういうものがない国もあるんだってわかった。

だとしたら、この先もこれで生活費を稼げるかも。

って、俺もなんだか商売メインになってきてるよな。

本来の目的を忘れちゃいけない。

「今日も頑張ろう」

今日も朝からマスコットを作って、出勤がてらお昼をすませて店に向かう。

毎朝キヨカは元気だ。

あまりに暇なのか、営業時間中もあちこちに出向いている。本人は、営業活動だと言っているが、どこまで本当なんだろうな。

「まあ、今日もぼちぼちしますか」

「ファイったら、元気がないぞ。もっと元気にしてないと、お客さんが来てくれないぞ」

「はいはい」

「ほら、笑顔だよ」

笑顔って……仮面を被(かぶ)ってるんだから、表情はわからないと思うんだけどな。

「仮面を被ってても、雰囲気わかるものだよ」

「……………」

心を読まれたみたいだ。

そんな調子で、今日も店に向かう。

そろそろ、この生活にも慣れ始めてきた。……って、それはそれでどうなんだろうな。

店に到着して準備を終えると、キヨカはどこかへ行ってしまった。

どこへ行くのか訊いたが、秘密だよ、としか言わなかった。

営業なのか、それとも暇つぶしなのか。俺としては、作業する事に変わらないから、どっちでもいいんだけど。

しばらくそうしていると、キヨカがなにかを持って帰ってきた。

「どこ行ってたんだよ」

「えへへ。あのね……」

と、キヨカが手に持っていたものを俺に見せてくる。

「買っちゃった」

それは、細長い箱だった。

まさか、俺へのプレゼント……なわけないよな。

パカッと開けると、中には銀色の細い笛のようなものが入っている。

「……………」

楽器には詳しくないので、それがなんなのかわからない。フルートの小さい版みたいな感じか？ フルートは、キヨカがいつも吹いているから見慣れている。箱の中は、その少し小さい感じの楽器だった。

「それはなんなんだ？」

「これはね、ピッコロだよ」

「ピッコロ？」

なんとなく名前は聞いた事がある……気がする。

「……で、お前は どうして、そのピッコロを買ったんだ？」

楽器の名前がピッコロなのはいいとしよう。だけど、それを買う必要はどこにあった？

「えっとね……。可愛かったからかな」

「はあ？」

どういう理由だ。

そんなのが理由になるはずがない。

「お前な……」

「前から欲しかったんだよ。でも、なかなか買うチャンスがなくて……。っていうか、普通だと結構高いんだよ。それがね、ここだと安かったの。試しに吹かせてもらったんだけど、すごくいい音色なんだ」

キヨカは大満足の買い物をしたというわけだ。しかも、お得に。

「だからって、少しくらい相談しろよな」

旅費は、キヨカだけのものじゃない。俺たち二人のだ。

「いいじゃない。ちょっとだけだよ」

「それでもさ……」

いくら安いって言っても、楽器だろ？ そこそこの値(ね)はするはずだ。

「はあ……」

だけど、返してこいとは言えなかった。

というのも、それを手にしているキヨカが、とても嬉しそうだったからだ。

「しょうがねえな」

「ファイなら、赦してくれると思ってたよ」

調子いいヤツだな。

「俺も、ちょっと気分転換に、この辺を歩いてくるわ。店番よろしく」

「うん。でも、無駄遣いはダメだよ」

「お前に言われたくない」

そう言うとキヨカは、にやははっ……と笑っていた。

反省とかそういうのはないんだよな。

店に戻ると、ちょうどキヨカがお客さんと話していた。

「あなたが作ったんですか？」

またこの質問だ。どうしてそうなんだろうな。

……って、今はキヨカ一人だから、そう思ってもしょうがないのか。

「ううん、これを作ったのはね……」

「俺です」

そう告げると、その女の人はやっぱり驚いた。まあ、急に話し掛けたってのもあるんだろうな

左右非対称の表情をした綺麗な青い仮面。この仮面は憶えている。あの小屋で見た時に、目が離せなくなってしまった仮面だ。だけど、自分で被るのは勇気がなかった。

そんな仮面をこの人が……。

羨(うらや)ましさとその度胸に感心するのと、なんだか妙な気持ちにさせられる。

こうして見ている、やっぱり引き込まれてしまいそうになる。

「やっぱり驚かれますか。俺が作ったって言うと、たいていの人は驚くんですよね……」

どうしても自嘲気味(じちょうぎみ)になってしまう。

「あ、その……違うんです」

その青い仮面の人は、なんとか取り繕(つくろ)おうとしている。

「別にフォローしてくれなくてもいいですよ」

いつも言われてますんで、と付け加えたくなる。それを言うと、なんだか嫌味(いやみ)に聞こえそうなのでやめた。

「本当に違うんです。私と一緒に旅をしている人が、最初に決めようとした名前がファイだったので……それで……」

名前……？

そういえば、仮面に彫られているからわかるんだった。

この青い仮面の人は……ティアナというらしい。

ティアナさんの驚きからすると、それは嘘じゃないんだろう。

「そうですか。ついいつも言われているもので、どうしても勘ぐってしまうんです」

変な受け取り方をした事を詫(わ)びる。

「よければゆっくり見ていって下さい」

なんだか親近感がわく感じだな。この人も誰かと旅をしているのか。

ティアナさんは、俺の言葉に頷いて、マスコットを眺(なが)めている。

——と、

「ティアナ！」

誰かの声が聞こえた。

声の方を見ると、誰かがティアナさんと呼んでいる。あの人が、一緒に旅をしている人なんだ

ろう。

「私、行かないと。また見させてもらいますね」

ティアナさんは、慌てて呼ばれた方へ駆けていった。

「綺麗だったね……」

「ああ、そうだな」

あの青い仮面は、やっぱり綺麗だった。

「ファイって、若い女の人にデレデレだ」

「はぁ？ どうしてそうなるんだよ」

わけがわからん。

「綺麗だったねって訊いたら、即答したじゃない」

「そりゃ、仮面の事に決まってるだろ。素顔なんて見えないんだから」

「そっか……そうだよ。確かに、あの仮面は綺麗だったよね。……ねえ、あれってあの時、小屋で見たものだよ」

どうやらキヨカも、記憶の片隅にあの仮面があったらしい。

「そうだろうな。あんな仮面が、いくつもあってたまるか」

あれだけ素晴らしい仮面がいくつもあるなんて、想像できない。あの仮面は、まさに奇跡の一品だ。

「でも、あの人はきっと綺麗だよ」

「そんなのわかるのか？」

確かに声は綺麗だったけど、それだけでわかるものなんだろうか。それとも、女性同士でなにか感じるものがあるのだろうか。

「わかるよ。でも、残念だね。あの人には、ちゃんと相手がいるみたいだから」

「別にそんなのどうでもいいけどな」

あの人が綺麗だろうがなんだろうが、俺には関係ない事だ。

「もしかして、ファイって略奪愛に興味があるの？ 私ってものがありながら。ハーレムを作ろうとしてるの？」

「だから、そういう発想をやめろって。俺たちは旅の途中だろ。あの人とは、これだけの縁だ。別になにを思うわけないだろ」

「それはそれで冷たいかも」

どうしろってんだよ。

自然とさっきの人が向かった先を見ていると、なにか大きな声が聞こえた。店先でなにを言っているんだろう。

「どうしたのかな？ もしかして、痴話喧嘩？ そこにファイが入り込んで……。ダメだからね」

「だから、そういう発想はやめろっての」

どうしてどうなるんだよ。

でも、なにを言い争っているんだか。ちょっと気になる。

そう思うと、ティアナさんがこっちに歩いてきて、店の前で立ち止まった。

「どうしたんだ？　なんだか大きな声が聞こえたけど」

言ってしまうから、ちょっと不躰だったかと思ったが、もうどうしようもない。

「こら、ファイ！　女の子には優しく……あ、でも、私以外にあんまり優しくされちゃうとなん
だか嫉妬(しつ)の炎がメラメラ……………でもでも、そんなファイも好き」

またそれか。

「シータ、黙ってろ。話が進まないし、お前の事はどうでもいい」

「そんなあ。つれないなあ。もしかして、照れてる？　ねえ。このっこのっ」

肘でつつかれる。

そんな俺たちを見て、ティアナさんから笑い声が聞こえる。

「あ、ティアナさんが笑った」

仮面で表情はわからなくても、仕草から様子はわかる。シータは、よっぽど嬉しかったのか、
ぴょんぴょんと飛び跳(は)ねている。

「お前はちょっと落ち着け」

思わずため息が出る。がしつと肩を押さえつけて、キヨカの動きを止める。

「ありがとうございます」

ティアナさんは深々と頭を下げる。

俺たちはなんにもしてないんだけどな。

「そんなに畏まらなくてもいいじゃない。私たち、別になんもしないし。そうだー」

そう言って、キヨカは懐からピッコロを取り出す。

「即興曲、タイトルは元気が出る曲。作曲はシータちゃんです」

そう言うのと、さっき買ったばかりのピッコロを吹き始める。

さっき買ったばかりのはずなのに、よくここまで吹けるものだ。まるで、ずっと吹いてきたみ
たいだ。

キヨカは体を揺らしたり、軽快に足踏みしたり、体全体でリズムを取って演奏している。

そんなキヨカを見ていると、自然と体が動いてしまいそうになる。

だけど、ここでキヨカのペースに巻き込まれたくないんだよな。そう思って、なんとか踏みと
どまる。

「ほれ、これで文句ないっしょ」

キヨカは満足そうに演奏を終える。

無駄遣い……なんて言えなくなってしまった。完全にキヨカの勝ちだ。

「まあ、な」

それ以外になにが言えるだろうか。

こんな演奏を聴かされて、なにも言えないよな。

「まあ、初吹きにしては、結構上手くできたかな」

「あの……初めて、なんですか？」

どうやら、初めての演奏って事が驚きだったようだ。普通はそうだろうな。

「初めてって……うん、そうなんだよね……」

キヨカはうっとりとした表情で、手元のピッコロを見る。

「これね、さっきその楽器屋で買ったの。いつもはフルートなんだけど、ちょっと可愛かったから……」

「そういや、そんな理由で買ったんだっただな。」

「でも、初めてなのにそんなに吹けるなんて……」

「まあ、指使いは一緒だし」

「なんだと？ そうなのか。」

「だったら納得だ。初めてでもあれだけ吹けるはずだ。」

「それでも間隔が違うだろうし、指使いが一緒だからってすぐに吹けるものなんだろうか。」

「やっぱり、キヨカはすごいって事だ。」

「ティアナ」

「あっ……」

「ティアナさんと呼ぶ声に振り返る。」

「フェイズ……」

「どうやら、ティアナさんのパートナーらしい。さっきは、喧嘩っぽかったけど、どうやらそういうわけじゃなかったらしい。」

「これで、ティアナさんも笑顔になれるよな……と思った時、」

「きゃあああっ！」

「どこからか悲鳴が響きわたる。」

「なにがあった？」

「その疑問は、頭の中に響いた声で解決してくれた。」

「蟲(ベステート) 発見せり、」

「蜘蛛(アラネーオ)が教えてくれた。」

「ファイ」

「ああ」

「俺たちは、ティアナさんをその場に残し、声がした方に走り出す。」

「ファイ。蟲(ベステート)、久しぶりだね」

「そうだな」

久しぶりの蟲(ベステート)だ。かれこれ、一ヶ月……いや、二ヶ月くらいは出現していない。あれから、どうしていたのかわからないけど、こっちはこっちで準備ができた。商売もしたけど。

ミカヅチさんとの修行の成果をみせる時だな。

「頑張ってるね、ファイ」

「ミカヅチさんに鍛えてもらったんだ。すぐに終わらせてやる」

「油断大敵だよ」

「……だな」

油断できる相手じゃないんだよな。

あっという間に横町の道を走り抜ける。そして、噴水がある広場に出る。

そこには蟲(ベステート)がいた。蟲(ベステート)は、広場を我が物顔で暴れ、周囲のものを破壊している。

広場には数人いるようだ。どうやら、逃げ遅れたらしい。

「シータ」

俺の言葉にキヨカは無言で頷き、蜘蛛(アラネーオ)を呼び出すために、左手のオープンフィンガーグローブを脱ぎ、左手に八角形を描く。

「よろしくね、アーちゃん」

キヨカはそう呟き、対角線を描いていく。

その間に、風伯(ふうはく)を抜いて正面に構える。

蟲(ベステート)は跳躍(ちょうやく)しながら移動するので、動きをとらえられない。

風伯の風で一気に吹き飛ばそうかとも考えたが、場所が悪すぎる。こんな場所で力を解放したら、建物どころか逃げ遅れている人を巻き添えにしてしまう。

「早く逃げろ！」

そんな場所にいられちゃ邪魔だ。早く移動するように一喝(いっかつ)する。

その声に反応して、腰を抜かして動けなかった人たちが、ゆっくりとだが移動し始める。

「シータ、そっちはどうだ？」

こうなりゃ、蜘蛛(アラネーオ)と一緒に戦うしかない。もっと広い場所なら、思う存分力を発揮できるのに……。せめて、人がいなくなれば……。

「もうちょっと」

蜘蛛(アラネーオ)の出現の予兆に反応したのか、蟲(ベステート)がキヨカを標的と定める。

「ちっ……こいつは、ちょっとは頭がいいようだな」

キヨカを護るために前に立つ。

「とにかく、まずは俺が相手だ」

風伯を上段に構える。

一瞬だけキヨカを確認して、そのまま蟲(ベステート)に突っ込んでいく。

ったく……。風伯の力を出さずに戦えるのか。

純粋な剣術をミカツチさんに鍛えてもらったから大丈夫だろう。だけど、やっぱり蟲(ベステート)相手に風伯の力なしは厳しいんじゃないだろうか。正直、自信がない。

とにかく、脚を潰さないとな。

セオリー通りに脚を狙う。

しかし、それを予測していたみたいに蟲(ベステート)は跳躍する。

「なんてヤツだよ……」

この一太刀がかわされるなんて……。

ちょっとショックだ。

跳躍した蟲(ベステート)は、そのままキヨカの真上に

「シータ！」

このままだと間に合わない。

「アーちゃん！」

シータが叫ぶ。

蟲(ベステート)がキヨカを襲うよりも一瞬早く、蜘蛛(アラネーオ)が出現した。

蜘蛛(アラネーオ)は蟲(ベステート)をはじき返す。

蟲(ベステート)はそのまま近くの店に突っ込んでいった。

「ありがとう……アーちゃん」

間一髪、難を逃れた。

よかった……と安心するのも一瞬で、次の瞬間には、翅を使って飛び上がった蟲(ベステート)が蜘蛛(アラネーオ)に向かって突っ込んでくる。

蜘蛛(アラネーオ)は避けきれずに、直撃をくらってしまう。

「アーちゃん！」

蜘蛛(アラネーオ)はその衝撃で動けずにいた。

その隙をつくかのように、蟲(ベステート)はキヨカに襲いかかろうとする。

キヨカは、蜘蛛(アラネーオ)を心配して蟲(ベステート)に気付いていない。

「シータ！」

一気に走り込み、蟲(ベステート)の攻撃を風伯で受け止める。

「くっ……」

なんて力だ。

ミカツチさんの剣戟(けんげき)もすごかったが、やっぱり蟲(ベステート)は桁違いだ。

受け流す余裕はない。かといって、このままじゃ、押し潰される。

ちらっと周囲を見ると、蜘蛛(アラネーオ)の出現で逃げ出す気力をなくしたのか、まだ人の姿があった。

まあ、人がいなくても、風伯の力を使えば、建物は多少壊れてしまうだろうから、解放できな

いんだけど。

いや、どうせ蟲(ベステート)が破壊したからもういいかも。

って、そんな場合じゃないよな。

蟲(ベステート)の力に耐えきれなくなって、ついに膝(ひざ)をついてしまう。

ミカツチさんに鍛えてもらったのにこの様だ。

「アーちゃん！」

キヨカの叫びに応えるように、蜘蛛(アラネーオ)が起き上がり糸を吐きかける。

その攻撃を受け、蟲(ベステート)は後ろに飛び退(の)いた。

「がっ！」

その衝撃が一気にきた。

なんて力だ。

俺を踏み台にした蟲(ベステート)は、蜘蛛(アラネーオ)から距離をとる。

俺は地面に叩きつけられ、息が一瞬できなくなる。

背中を強く打ったみたいで、呼吸が上手くできない。

ちょっと意識も朦朧(もうろう)としてきた。思った以上に、強く打ちつけられたみたいだ。

そんな俺の耳に、

――パキッ！

と、そんな乾いた音が聞こえた。

蜘蛛(アラネーオ)の反撃を受けた蟲(ベステート)は、そのまま姿を消してしまった。

また逃げられてしまった。

ミカツチさんに鍛えてもらったのに……。

キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を封印する。

蟲(ベステート)に逃げられてしまったせいだろうか、キヨカにいつもの覇気(はき)がない。

そんな姿を見ていると、意識が遠のいていった。

「っ！」

目を開き、起き上がろうとするが、体に力が入らない。気持ちでは飛び起きた感じなんだけど、全く動いていない。

関節が、油が切れてしまった機械のようだ。

「ファイ……」

キヨカは目に涙を浮かべている。

俺、どうしたんだ？ そもそも、ここはどこだ？ ここは、俺たちが住んでいる部屋か。

確か、蟲(ベステート)と戦って……。

そうだ、負けたんだ。

全く歯が立たなかった。手も足も出なかった。

いくら風伯の力を使えなかったとはいえ、完敗もいいとこだ。

それからどうなったんだ？

記憶はそこまでしかない。

いや、その直前になにかを聞いた。

風伯！

風伯はどこなんだ？

慌てて風伯を探す。

「風伯は、風伯はどこだ？」

部屋を見回すが、風伯は見当たらない。

風伯、風伯はどこなんだよ。

そんな風になっている俺から、部屋にいた全員が視線を逸らす。そういや、キヨカ以外のこの人たちは……。ああ、さっき店に来ていた旅の……。

どうしてここにいるのか——それは考えるまでもないだろう。きっと、この人たちは、俺をここまで運んでくれたんだろう。

夢じゃなかった……………。

途端に全身から力が抜ける。

蟲(ベステート)と戦うために必要な刀を折ってしまった。

俺の一部だった風伯。それを折ってしまった。

「そう……か」

受け入れるとか、そういう問題じゃない。

もう、どうでもいいとさえ思えてくる。

風伯の力なしに、俺になにができる？

なにもできないだろ。

普通の武器じゃ、蟲(ベステート)と戦う事はできない。

キヨカを護る事だってできやしない。

完全に足手まといだ。

キヨカには蜘蛛(アラネーオ)がいるからいいさ。だけど、俺にはなにもない。俺がいる意味がなくなってしまう。

見ているしかできなくなった俺は、ただの移動に必要な道具でしかない。

蟲(ベステート)を封印する時は、俺は見ているだけ。全て蜘蛛(アラネーオ)とキヨカに任せるしかない。

.....

.....

.....

そっと、誰かが部屋を出ていく気配だけを感じる。

あの二人か.....

残された俺とキヨカだが、お互いになにも言えずにいる。

そもそも、俺はどんな顔をすればいいんだよ。

キヨカのじいさんから預かった、大切な刀を折ってしまったんだぞ。こんな事、じいさんはもとより、神様たちにだって.....

まさかこんな結末になるなんてな。

ミカツチさんの所で修行して、少しくらい強くなったからって、蟲(ベステート)と戦うために必要な風伯を折ってしまうなんて.....

第一、風伯自身に申し訳ない。

せっかく、俺を相棒と認めてくれたってのに.....

「ごめんな」

風伯を手取る。

刀身が見事に折れてしまっている。鞘(さや)に入れていけばわからないけど、そういう問題じゃないよな。

この先、俺はどうすればいいんだろう.....

風伯を元に戻すなんて.....できるわけないだろ。

日本刀は、折れても火を入れて鍛えれば復活できるらしいけど、これはそんじょそこいらの刀じゃない。伝説の四刀だ。そう簡単に直せないだろう。そもそも、そんな事ができるんだろうか。

やっぱり、ここでお別れなのか？

ごめんな、風伯.....

キヨカは思い詰めているのか、俯(うつむ)いたままなにも喋らない。悪いのは俺なのにな。

まあ、慰められてもどうしようもないんだけど。

なんとか、神様に連絡できないものかな.....。ここで中断.....なんて、無理な話だよな。

そもそも、俺たちは行きたい世界に移動できるわけじゃないし。

やっぱり、ここで立ち往生(おうじょう)なのかな.....

はあ～。

どうしようもなくしていると、誰かが部屋に入ってきた。戻ってきたのか。

「ファイさん、この刀、もしかしたら直せるかもしれませんよ」

直せる？

ゆっくりと顔を上げる。

その言葉に、キヨカも顔を上げ、それは名案だとばかりに頷いている。

「……………直す？」

そんな事、できるわけないだろ。俺だって、少しは考えたさ。だけど、あんたは知らないだろうが、この刀は普通の刀じゃないんだぞ。

言ってやりたいけど、言葉にするのはつらい。

「そうですよ。これをまた繋げてもらえば……………」

ティアナさんが賛同する。

「……………それは無理だろうな。こいつを繋げるなんて、そんじょそこいらの刀鍛冶(かたなかじ)にはできないんだよ」

正直、イラッとした。俺だって、そうできればいいと考えたさ。だけど、それは無理なんだよ。

「きっとあの人ならできますよ」

無理だって言っただろ。なのに、どうしてこの人は、まだそういう事を言うんだ。

「誰ですか？」

キヨカが訊く。元に戻せるかもしれないっていう、その一縷(いちる)の望みに賭けるのか？　そもそも、事情を知らない人の話だぞ。

「ウォンカさんです」

「……………ウォンカ？」

誰だ、それは。

キヨカは知ってるんだろうか。目でそう訊く。

「……ウォンカさん……………？」

だが、キヨカも思い浮かばないようだ。腕を組んで考えているが、わからないのだろう。

「芸術家横町にある刃物屋の……」

と、その補足で、

「ああ、あの……………」

どうやら、キヨカはそれでわかったらしい。

「お店には行った事ないけど……………。そうか、あそこならなんとかなるかもだね」

キヨカは光明(こうみょう)を見だしているみたいだが、

「……………刃物屋？」

刃物屋って、どんなだよ。まあ、刃物を売ってるんだろうけど。

「そんなもん、あったのか？」

「もう……………。ホントにファイはご近所さんを知らないんだから……………。あの横町にどんなお店

があるのか知らないでしょ」

キヨカは完全に呆(あき)れている。

「あの店は臨時で最近出したばっかだし、そんなの……近所なんて知らなくても問題ないだろ」

そもそも、俺は店でマスコット作りばっかだったからな。キヨカみたいに、横町を歩き回っていないから、知らなくて当然だろうが。

「うっわ～。近所付き合いは大事だよ。大切なんだよ。重要なんだよ」

「うっせえ！ 何度も同じ様な事ばっか言うな」

そんな風に言われるとムカつく。

「言わないとわからないからでしょ」

即答で返された。

「お前は俺の母親かってんだ」

「……ガキ」

なんだ、それ。

「お前もな」

ぷいっとそっぽを向く。

なんだか、こんなやり取りが、久しぶりに思えてくる。知らないうちに、重苦しい空気を取り払われていた。

「まあ、なんでもいいけどよ。とにかくそこに行ってみようぜ」

とにかく行けばわかるだろ。無理で元々だ。

「……っててて」

起き上がろうとするが、体が接着剤で固められているみたいに動かない。

「ちょっと……無茶しちゃダメだって」

そう言いながら、優しく体をさすってくれる。

「ああ、悪い……」

ゆっくりと横になる。少しはマシになったかな。

「とにかく、動けるようになってからだね……」

「仕方ないか……って、そんな事言われてっか」

そりゃ、その方がいいんだろけど。今は時間がない。

もし今、蟲(ベステート)が出現したらどうするんだよ。俺はなにもできない。

刃物屋なら、他の武器があるかもしれない。無理だとわかっているけど、それで乗り切るしかないだろ。

「……てててっ」

「こら、ファイ！ さっき無理だって言ったばっかじゃないの」

ゆっくり起き上がろうとしても、やっぱり難しいみたいだ。

「ったく……。ホントに莫迦(ばか)だ」

呆れているものの、キヨカは笑顔だった。

再び芸術家横町に戻ってきた。

普段なら数分の距離だが、俺のせいでかなり時間を掛けてしまった。

俺はキヨカとフェイズさんに両方から支えてもらい、なんとか歩ける状態だった。

少しずつ動けるようになっているが、やっぱり歩く事ができない。

風伯は、ティアナさんが持ってくれている。重そう……ってというか、実際結構重い。

それにしても、この状況ってすごく恥ずかしいよな。人がいないと気にしなかったが、見られていると思うと恥ずかしい。

いっそ、一人で歩きたいけど、それができないのは自分がよくわかっている。

今はこの恥ずかしさに耐えて、早く目的地に着くように願おう。

なので、到着した時は本当に嬉しかった。

それにしても、本当に元に戻せるのだろうか。

「入りましょう」

フェイズさんに促され、俺たちは店内に入る。ティアナさんが、一瞬戸惑っていたようだが、結局入ってくる。

驚いた。店内は想像以上だった。

所狭しと刃物が飾られている。思わず竦んでしまいそうになる。

「よう、あんたか。悪いがあのナイフはまだだぞ」

奥にいた店主が声を掛けてくる。どうやら、以前になにかを注文していたらしい。

「あ、いえ……ちょっとそれとは別の用なんです」

フェイズさんがそう言って、ようやく店主は俺たちの存在に気付いたようだ。じろっとこっちを見る。

鼻の部分が長く、なんだかピノキオのようにも見えなくはない。しかし、表情はなくてぼんやりとしている。全体的に銀色をしているので、余計にそう感じるのかもしれない。よく見れば、細い目があり、口許(くちもと)は不敵な笑みを浮かべている。

なんとなく胡散(うさん)臭い印象を与えられる。

「で、どういった用件だ？」

突然の訪問だから……というわけではないだろう。なにせ、ここは店なんだから。この人の不審(ふしん)そうな視線は、俺に対してなんだろうな。なにせ、俺は二人に体を支えられたままなんだから。

「ちょっと……」

と、カウンターまで歩き、フェイズさんは俺の体をカウンターに預ける。そして、

「これは僕のものではないんですけど……」

と、ティアナさんから風伯を受け取って、カウンターに置いた。

「木刀は専門外だが」

店主の言葉は当然だろう。刃物を扱うような店に木刀を持ち込む者はいない。

「わかっています」

フェイズさんは、風伯を鞘から抜く。折れてしまったせいで、誰でも抜けるようになってしまっている。つまり、もう風伯の力はないって証(あかし)だ。

「……………」

徐々に露(あら)わになっていく風伯の刀身を見て、店主が息をのんだのがわかった。

しかし、その刀身が折れている事を知った時、残念そうな空気を感じた。

フェイズさんは、折れた刀身を含め、全てをカウンターの上に並べた。

「もったいないな」

それが、風伯を見て店主が発した最初の一言だった。

それを聞いて、胸が貫かれる思いだった。

そんな事は、俺が一番わかっている。思わず泣きそうになってしまう。

こんな状態で泣いてしまったら、俺ってメッチャ情けないヤツだよな……。

そう思うと、なんとか涙を堪(こら)える事ができた。

「で、これをどうしろと？」

わかっているはずなのに、あえてそう訊いてくる。

「あの……これを元通りにして欲しいんです」

フェイズさんが告げると、

「これは、あんたのか……」

店主は、俺を値踏みするように見る。仮面で表情はわからなくても、なんとなくその下の表情がわかる気がする。

「……………なるほどな」

意味深な頷きだった。

「この先の広場になんか化け物が現れたと言われているが……そいつと闘ったってのがあんたか」

それは質問というわけではなく、自分の中で確認したという感じだった。

「なるほどな……………」

もう一度頷くと、風伯の刀身を見る。

「この刀は素晴らしい業物(わざもの)だ。並の刀匠の業じゃない。それを、こんなにしちまうとはな……………」

その言葉は痛かった。

「……………」

なにも言えず、ただ唇を噛む事しかできなかった。

「……まあ、化け物相手だったっていうし、ある程度は仕方ないだろうな。それに、折れてしまったもんは折れてしまったもん。どう足掻(あが)いても、その事実は消えん」

「……………」

いちいち的確に突いてくる。

「それに――これを見る限り、あんたは人を一度も斬っていない。それは評価できる。手入れも

いい」

少しだけ口調が優しくなった。

「これが折れてしまったのは、あんたのせいじゃない。きっと、誰が使っても折れていたと思うぞ」

そんな言葉、今の俺にはなんの慰(なぐさ)めにもならない。きっと、じいさんなら……。そう、じいさんなら折る事はなかったはずだ。それにもし、ミカツチさんが使っていたら……。やっぱり、こうなっていなかっただろう。

「さて、感想なんてどうでもいいわけだ。これを元通りに繋げる……。だったな」

真剣な眼差しが向けられる。それに応えて、俺も真っ直ぐに見る。

「……はい」

「……………」

店主はしばらく考え込む。そして、結論を言われる。

「諦めろ」

「「「「……………」」」」

四人の時間は一斉に止まった。

「諦めろ、

つまり——もう元には戻らない。

そんな……………。

「どういう事だよ！ もう、こいつは直せないってのか？」

わかっていたはずなのに、つい声を荒げてしまう。思わずバランスを崩し、キヨカがなんとか支えてくれた。

「おい、どうなんだよ」

店主は微動だにせず、ため息を一つ。

「やれやれ……せっかちだな」

と、そうこぼした。

「では、あんたに訊こうか」

口調が陰(けわ)しくなる。と同時に、睨(にら)むような視線。

「な、なんだ……よ……………」

なんとか気張るものの、語尾が小さくなっていく。

「その腕前で勝てる自信はあるのか？」

「……………え？」

その言葉の意味が一瞬わからなかった。

「お前の腕前で、同じ刀を使ってもまた折るだけだとは思わないのか？」

「……………」

正論かもしれない。

確かに少しは強くなった自信はある。

だけど実際、風伯を折ってしまった現実がある。

直したとしても、いずれまた折ってしまうかもしれない。

けど――

俺には風伯しかない。

「これを繋げる事は簡単だ。これほどの業物だ、火を入れれば甦るだろう。綺麗に折れてもいる。だが――それを使っても、また折れるのが関の山だろう」

俺と同じ考えだ。

それでも、俺には風伯しかない。それは変わらない。

「ウォンカさん、あれを……」

フェイズさんが壁を指す。

そこには逆刃(さかは)の劔(つるぎ)があった。

なんだあれは……。

目が離せない。

「……こいつか。さすがだな」

「ウォンカさん。いくらでも払います。この劔を……」

フェイズさんは必死に頼み込む。自分のためじゃなくて、俺のために。

「悪いが、こいつは売り物じゃないんだ」

「ウォンカさん……本当に……」

「金の問題じゃないんでな」

食い下がるフェイズさんを、優しく叱責(しっせき)する。

その言葉に、フェイズさんは冷静さを取り戻す。

「すみません……」

「フェイズさん、ありがとうございます」

キヨカがお礼を言う。俺は嬉しくて泣きそうになってしまい、声が出なかった。

どうして、この人はこんなに親身にしてくれるんだろう。俺たちは、ついさっき会ったばかりだ。それなのに、こんなに俺たちのためにしてくれている。

この人たちって、いったい……。

まさか、神様たちじゃないよな。それはさすがにないか。第一、声が全然違う。

「そういうわけでな、こいつは売り物じゃない」

店主は、そう言って俺を見ている。

なんだ？ 売り物じゃないんだったら、俺には関係ない。それに、風伯を直しても、俺にはもう使えないかもしれない。

「そこのあんた、ちょっとこいつを持ってきてくれないか」

店主は売り物じゃないという劔を壁から外すと、俺の前に差し出した。

「……」

確かに立派なものだという事は俺にもわかる。

確かにいい劔かもしれない。けど……。

どうしても風伯の事を考えてしまう。

この劔がいいものだとしても、俺には関係のないものだ。風伯でなければならない。
もしこれを手にしてしまえば、風伯を忘れてしまうんじゃないだろうか。そんな考えがどこか
にある。

「安心しろ。別にこれを持ったからといって、必ずあんたにやるわけじゃない。あくまでも、持
ってみろと言っているだけだ」

まるで俺の心を見透かしたかのようだ。

じゃあ、せっかくだから……。

そう思いつつ、どこか後ろめたくもあり、恐る恐る手を伸ばす。

――パチッ！

一瞬、電気が走った。

思わず手を引く。

静電気……？

いや、そんなはずはない。この手のもので静電気なんかない。

じゃあ、この劔が帯電している……わけでもなさそうだ。店主はこれを素手で持っている。
変わった様子はない。

他の三人にも、さっきの音が聞こえたのか、不思議そうに見ている。

「……………ほう」

だが、店主だけは嬉しそうに頷いた。

もしかして、なにかの悪戯(いたずら)だったのか？

でも、そんな事をするような人じゃなさそうだ。

店主は何事もなかったかのように、鞆に収めている。

「これは、あんたのものだ」

そう言って、俺に押しつけるようにカウンターに置く。

「……………えっ？」

いったいどういう事だ？

俺のもの？

さっきは、売り物じゃないって言ってただろ。売り物じゃないのに、俺のもの？

どういう事なのか、さっぱりわからない。

第一、俺はこれをもらっていいんだろうか。

「こいつは売り物じゃないってのは本当だ。だから、金はいらない」

店主はニヤリと笑った気がした。

「こいつはな、主(あるじ)を待っていたんだ。ずっと、な」

店主は真っ直ぐ俺を見る。

「……………もしかして、俺？」

その主ってのが、俺なのか？

いやいや、わけがわからない。

突然、この劔の主だとか言われても……。

「そうだ。あんたがこいつの主だ」

だから、どうして俺なんだろう？

「でも、どうして……………」

「こいつを持った時、電気が流れただろ？」

確かにそうだ。突然すぎて驚いた。

「そいつは、こいつが主と認めた証だ」

電気が証？

ますますわけがわからない。

「こいつはちょっと特殊な劔でな……。持ち主を選ぶんだ。まるで意思があるようにな。別に、持ち主以外が持てないというわけじゃない。もちろん、普通に劔としては使える。だが——こいつの本来の力を使えるのは、こいつが選んだ主だけだ。こいつは、その主を——つまり、あんたをずっと待っていたのさ」

「意思がある……？」

まるでメルヘンかファンタジーだ。意思があるって、いかれちまったとしか思えない。

でも……。

俺たちはそういう刀を知っている。

風伯だ。

風伯も認めた主以外は抜く事ができない。

もしかして、こいつもそういうものなのか？

恐る恐るその劔に手を近付ける。

「……………」

ゴクリと唾(つば)を飲み込む。

そして——

—————

—————

——

なにも起こらない。

「最初のあれは、持ち主を示すための挨拶(あいさつ)のようなものさ。常に帯電しているわけじゃない」

そう説明される。

「今はまだ使いこなせないだろうが、あんたの腕が上がればこいつはそれに応えてくれる。本当の力を貸してくれるだろう。まあ、その時が来るといいがな」

店主は豪快(ごうかい)に笑う。

「まあ、そいつの主が見つかったのはいいとして――こいつだな」

店主は風伯を持つ。

「見事に折れている……。この刀身じゃ折れるだけだろう」

改めて聞かされると痛い。

「これを捨てる事は――」

一瞬、俺を見る。

「――できるはずがないだろうな。もっとも、簡単に捨てる事ができるヤツを、主を選ぶとは思えないしな」

さてどうしたものか……と、店主は腕を組んで考える。

「刀身を鍛え直す事はできませんか？」

風伯を分解する。刀身を鍛え直して、作る事だけでもできれば……。繋げるのが無理なら、これをもう一度、完全に鍛え直せば……。

「悪いが、これをこれ以上に鍛える事は不可能だ」

返ってきた言葉は、希望を打ち砕いた。

「だが――」

その言葉に、場の空気が一瞬止まる。

「――新たな刀身を打つ事はできる」

新しい刀身？

それって、この刀身を捨てて、新しい刀身に入れ替えるって事だろ？

そんな事、できるわけじゃないか。それはもう、風伯じゃない。

それをしてしまえば、ここまで一緒に旅をしてきた風伯を捨てる事になる。

「どうしても、この刀身を甦らせる事はできないのか？」

声に苛立ちが混じる。

「ファイ……」

そんな俺を窘(たしな)めるようにキヨカが言う。だけど、キヨカも同じ気持ちのはずだ。ここで風伯を捨てる選択はあり得ない。

「折れるだけだぞ」

はっきりと言い切られる。

「変に希望を持たれても困るからこそハッキリ言う。あの刀身で勝つ事は不可能だ。腕の問題じゃない。刀身が限界なんだ」

「……………」

刀身が限界……。

確かに、今まで闘ってきた蟲(ベステート)に対し、風伯任せで斬りかかった事ばかりだ。

風伯の本当の力も、刀身に負担を掛けるんだろう。

「好都合なのが、分解できるという事だ。新しい刀身に入れ替える事ができる。生まれ変わる事ができる」

どうするんだ？ と訊かれる。

今のままだと、風伯は近い将来また折れるという事だろう。かといって、ここで風伯を捨てるなんてできない。折れたままにしておく事もできない。

どうしたら――

どうすればいい……？

思考がグルグル回って、解決の糸口が見えてこない。

「そこで提案なんだが、こいつを切ってみる気はないか？」

どういう事だ？ その意味がわからない。

「……………どういう事、ですか？」

もしかしたら、これが解決策になるのか？

「この折れてしまった刀を切って、短刀にするんだ。もちろん、柄は新しく作る。鞘もな。それで、新しい刀身を鍛え上げて、こいつに付ける。どうだ？」

折れた風伯を短刀にして、新しい風伯を打つ？

それなら、風伯を残す事ができる。違う形になってしまうけど、風伯と一緒に旅を続けられる。

「シータ……」

キヨカにも訊いてみたいと思って見る。

「ファイの思うようにしていいよ」

キヨカは笑顔で頷いた。

「……………」

目を閉じて考え込む。

このまま風伯を捨てるか――それはダメだ。

折れるとわかっている風伯を使うか――捨てるよりはマシだ。

風伯を切って、短刀として甦らせるか――それもいいかもしれない。

でも――それは風伯じゃなくなってしまう気がする。

新しい刀身を風伯として――

決めた。

もう迷わない。

「新しい刀身を打って下さい。風伯は短刀に打ち直して欲しい」

それが、俺が出した答えだ。

「ファイ……」

キヨカも納得してくれるはずだ。

「よろしくお願いします」

深々と頭を下げる。キヨカに支えられたままで不格好だけど。

「任せておきな……と言いたいのだが、こいつは大仕事でな、一人じゃどうにもできん」

「……………」

せっかく光明が見えたと思ったらこれだ。

「それはどういう事ですか？」

そう言って詰め寄ったのはキヨカだ。

「あんたたちはせっかちな……。落ち着け。誰も打たないとは言っていないだろうに……」

店主は呆れた風に肩を竦(すく)める。

「ウォンカさん、説明してもらえませんか？」

フェイズさんが訊く。

「あなたは冷静でいいな。あんたたちも見習ったらどうだ？」

「……………」

嫌味ったらしく言われると、俺たちはなにも言い返せない。

「まあいい。確かにこの仕事は引き受けた。だが、一人でできるもんじゃない」

「つまり……」

フェイズさんが相槌(あいづち)を打つ。

「あんたたちに頼みがある。その代わりと言っちゃなんだが、料金は安くしとくよ」

頼み……？

なんだか、嫌な予感がする。

「なんですか？」

落ち着いているように振る舞っているが、フェイズさんも動揺しているのがわかる。

「ココから少しーいや、そこそこ離れた場所にゼファーというヤツがいる。そいつを連れてきて欲しいんだ。

「ゼファー……」

フェイズさんがその名前を反芻(はんすう)する。

おそらく、ウォンカの関係者なんだろう。それだけなら特に問題なさそうだ。

「そいつは刀匠(とうしょう)なんだがな、隠居(いんきょ)を決め込んでしまっただけ……。ちょっと僻地(へきち)にいるんだ。ちなみに、その逆刃(さかや)の劔(けん)を打ったヤツでもある」

「……………」

これを打った人物？ この店主じゃなかったんだ。フェイズさんも驚いているようだ。

「正確には二人の共作(きさく)なんだがな」

そう言う店主は自慢(じまん)そうだ。

「どうしますか？」

フェイズさんが訊いてくる。

答えは決まっている。

「俺はもちろん行く。風伯(ふうはく)のためだしな」

「私は、ファイが行くならもちろん」

キヨカは、訊かれるまでもないって感じだ。

「わかりました。そのゼファーさんを連れてくればいいんですね」

フェイズさんがまとめる。

「そういう事だ。ついでに、刀の材料も持ってきてもらいたい」

「材料……ですか？」

人だけじゃなく、材料もか……。ちょっと甘かったみたいだ。

「ああ、エピアという鉱物でな、そいつが必要なんだ。どんな鉱物かはゼファーが知っている。ヤツに訊けばわかるだろう」

「わかりました」

自分たちで、どんなものかもわからないのに掘れと言われるかと思ったが、これならなんとかなりそうだ。いや、なんとかするしかない。

「安心していい。あんたたちにエピアを採掘しろとは言わないからよ」

不安そうな空気を察したのか、店主が補足する。

「……そうですか。そういう事なら」

フェイズさんは胸を撫で下ろす。

「そういうわけでだ……」

カウンターの下から地図を取り出して、フェイズさんに渡す。

「ここが現在地」

そう言って、店主は一点に印をつける。

「……で、目的地がここだ」

「「「「……………」」」」」

俺たちは言葉を失った。

店主が指した場所は、対角線の反対側。しかも、そこは山岳地帯だ。だけど、考えてみれば、鉱物を採掘するなら山岳地帯だよな。

「この辺は幽谷(ゆうこく)と呼ばれている。昔は鉱山として栄えていたんだがな、今では掘り尽くしてしまって誰もいない。だからこそ、ゼファーが居ついてるんだがな」

なるほど……。

確かにそこには `Profundaj monto valo、と書かれている。

だけど、こんな場所か……。

「冗談だろ？」

俺以外もそう思ったはずだ。

国を横断するようなものだ。決して狭くない国土。それを横断？ 列車があるとしても、三日は掛かりそうだな。

しかも山奥だろ。そこまでは列車はないだろう。

降りてからも、かなり歩く事が考えられる。ちょっと、甘かったかな。

「どうした？ 諦めるか？」

どこか意地悪な質問だ。こんな事で諦めるわけにはいかない。

「……………くっ。わ、わかった。行ってくる。行ってくればいいんだろ」

ええい、こうなりゃ自棄だ。風伯のためにも、絶対に行ってやる。

なんだか、この店主にはめられた気がするのはどうしてだろう。いい感じに踊らされている気がする。

「そういうわけで、よろしく頼んだ」

一度部屋に戻ってくる。

少しは体が楽になって、ゆっくりとなら一人で歩けるようになった。それでも、キヨカが支えてくれている。

ちなみに、あの逆刃の剣は、フェイズさんが持ってきてくれた。

帰りに、フェイズさんはこの国の地図を買っていた。

「ところで、どうしてあんたたちも行くなんて言ったんだ？」

本当にどうしてこの人たちは、そこまで俺たちに関わろうとするんだろう。

俺たちは、この人たちに見覚えはない。もっとも、顔は見えないんだけど。だけど、こうされるような記憶はない。

「こう言っちゃなんだが、どう考えてもあんたたちは無関係だろ？ これは完全に俺たちの問題だ。むしろ、あんたたちは巻き込まれただけ——というか、俺たちが巻き込んじゃったようなもんだろ？ それなのに、どうして……」

冷たい言い方かもしれないが、そう言えばもしかしたら離れていくかもしれない。

一緒に来てくれるのは嬉しい。だけど、巻き込むのは心苦しい。

「理由が必要——ですか？」

フェイズはにこやかに笑う。見えなくても声でわかる。

「できれば聞かせてもらいたい」

「そうですね……興味があるから、ではダメですか？」

少し考える素振りをしたが、答えは最初から決めていたんだろう。

だが、だからといって、そこまで巻き込んでいいものだろうか。

どうすればいいんだ？

そういえば——と思い出す。

この人たちは、蟲(ベステート)を知っている節がある。どうして知っているんだろう？ 見た感じ、俺たちやヒナゲシさんたちのように、蟲(ベステート)を封印して旅をしているようには見えない。この人たちからは、戦いの空気みたいなものを感じない。

だったらどうして？

どこか別の世界で、俺たちのような旅をしている誰かに会ったのか？

いやいや、そうするとこの人たちも、俺たちと同じじゃないか。

実際、他にも会っているから、俺たちだけなんて思わないけど、それにしたって……。

なあ、どうすればいいんだ？ 俺は、これを受け入れればいいんだろうか。

ふと気付けば、逆刃の剣に手を置いていた。まるで、こいつに訊いているみたいじゃないか。

「せっかく、フェイズさんとティアナさんがこう言ってくれてるんだし……」

キヨカが手を重ねてくる。

「私たちは旅をしているだけです。なので、色んな場所に行ってみたいんですよ。ですから、巻き込むとかは気にしないでください。ほら、旅は道連れって言うじゃないですか」

「ティアナ、それは僕たちの世界だけかもしれないですけどね」

「そうでしたね」

ティアナさんが柔らかい声で笑う。

「もちろん、お二人が迷惑と思うのでしたら辞退しますが……」

そう付け加えられた。そう言われると、なんだか断りづらい。

「わかりました」

完全に負けたな。

確かに、旅は道連れなのかもな。それに、この人たちが悪い人には思えないし。ただ、よくわからないのは本当だ。どこまで信用できるかわからないけど、もしそうなったらその時になんとかすればいい。

「せっかくだし、この旅だって二人だけだと大変だろうし、そう言うのなら一緒に行きましようか」

なんとなく投げ遣りというか、上から目線っぽいかな。でもまあ、一緒なのはいいかもしれない。

「ありがとうございます。では――」

そう言うと、フェイズさんは買ったばかりの地図を広げる。

「――ここが、僕たちがいる場所」

地図でいえば右下辺り。南東に位置している。

「そして、目的地はここ」

北東部の山岳地帯を指す。

改めて見ると、完全に反対側だ。大変な距離の旅になる。

「これは大変そうだな……」

思わずそんな言葉がこぼれる。

「確かに遠いですね……。この距離は、どのくらいになるんでしょう」

そう言いつつ、フェイズさんは、地図の縮尺から距離を推測する。

俺たちとしては、数字を知るのが怖いので聞きたくない。実際の距離を知ると、その大変さを突きつけられてしまう。

ただ、ミカツチさんがいた街よりも距離がある。あの距離の倍近くはあるだろう。

「じゃあ、列車の出発日を確認してくるね」

「そうだな、頼む。ついでに……」

「食料も買ってくるよ」

「ああ、頼む」

キヨカになら言わなくてもわかってるよな。そういう事に関しては、俺よりもしっかりしているし。

しばらくして帰ってきて、出発日を教えてくれた。出発は、明後日になるらしい。なので、食料なんかは明日一緒に買いに行こうという話になった。ついでに、部屋も解約する事にした。なにせ、往復だけで一週間はかかりそうだもんな。無人なのに、家賃を払うほど余裕はない。

出発当日、駅に到着すると、駅はそれなりに混んでいる。だけど、俺たちが向かう方面は誰もいない。なにしろ、今はほとんど人がいないらしいからな。それでも、住んでいる人のための物資を運搬するために、定期的に列車は走っている。

「この世界にも、列車があるんですね……」

「すごいですね……」

と、初めてこの国の列車を見た、フェイズさんとティアナさんは、しきりに感心している。
この世界……？

やっぱり、この人たちも世界を移動しているのか？ 普通の旅人なら、この国って言うよな。まあ、言葉の綾なのかもしれないけど。

だけど、やっぱり蟲(ベステート)と戦っている雰囲気はない。もしかして、それ以外の目的で旅をする人たちがいるのか？ 本当にただ世界を見ているだけなのか？ そういう旅もあるのか？

それってなんだか羨ましいかも……。まあ、行きたい場所に行けないのかもしれないけど。

「この列車、国が広いから、目的の駅まで結構かかるんですよ」

キヨカが説明する。

「あの距離だと……多分、丸三日くらい」

俺もそのくらいだと思う。もしかしたら、もう一日多く掛かるかもしれない。

「「……………」」

それを聞いて、フェイズさんとティアナさんが絶句するのがわかった。そりゃそうだろうな。まさか、丸三日も掛かるなんて思ってなかっただろう。

国土の広さと、この列車がそれほど速くない事の両方が合わさって、こういう結果になる。

だけど、列車があるだけいいんだよ。これを徒歩で行くとか考えたら……それこそいつ到着できるかわからない。

「長い旅になりそうですね」

ティアナさんが呟く。

確かに丸三日は長いかもな。丸二日でもきつかったのに……。しかも、今回はする事がない。ただ、四人になっただけ退屈しないかもな。

列車の旅は快適だった。

キヨカの発案で、人形作りをしながらの旅となったが、暇になる事もなく会話も弾んだ。

ただ、この国の外での過去や経歴に関する事は話せないなので、どうしても俺たちがこの国に来てからの事が中心になる。

フェイズさんとティアナさんは、なかなかいいコンビだった。

フェイズさんは、左手が不自由らしく、製作作業は難しいようだが、生地(きじ)の組み合わせなどティアナさんや俺にアドバイスをくれる。どうやら絵を嗜(たしな)むらしく、美術的なセンスがあった。斬新(ざんしん)な組み合わせから、定番というか、色が綺麗に見える組み合わせまで、

色々アドバイスをもらいながら作る。俺だけだと、こうはできない。これからの参考にもなる

。

この人たちと出会えてよかった。本当にそう思えた。

そんな列車の旅の平和は、二日目に崩れてしまった。

列車は、荒野を何事もなく走っていた。

その時までは――

マスコット作りに疲れて休憩していると、窓の外に黒い影が見えた。

特に気にしてなかったが、直後に急ブレーキが。そして、頭の中に声が響いた。

「蟲(ベステート) 発見せり、

蟲(ベステート)だと？

こんな場所で？

「但(ただ)し 我らが封印すべき 蟲(ベステート)とは 違(たが)えり、

.....どういう事だ？

蟲(ベステート)だけど、俺たちが封印すべき蟲(ベステート)じゃない？

違うってのは.....。

思い浮かんだのは、ヒナゲシさんたちだ。あの人たちも蟲(ベステート)と戦っていた。あの人たちには、あの人たちが戦うべき蟲(ベステート)がいて、俺たちが封印している蟲(ベステート)とは違った。

つまり、今回もそういう事なのか？

俺たち以外の誰かが戦っている蟲(ベステート)なのか？

「ファイ」

「ああ」

悩んでいてもしょうがない。とにかく、蟲(ベステート)を放置しておくわけにはいかない。

「シータ、とにかく戦おう」

「そうだね。放っておくなんてできないもんね」

「ああ」

列車は停車してしまっている。蟲(ベステート)の出現で、緊急停車させたんだろう。動いているとどうしようもなかったが、これなら降りて戦える。

ただ、問題としては、俺の手元に風伯はない。あるのは、この逆刃の劔だけだ。これで蟲(ベステート)をなんとかしなければならぬ。

「フェイズさんとティアナさんはここにいて下さい。俺たちは、ちょっと外に出ます」

「.....はい、わかりました」

フェイズさんは頷きながら、ティアナさんを止めている。彼女は席を立とうとしていた。

「僕たちが出ていってもなにもできませんよ。邪魔になるだけです」

「それでも.....」

「ここは任せましょう。僕たちは、ここで待つのが役目です」

ありがとうございます。

「行こう」

「うん」

キヨカは既に、左手のオープンフィンガーグローブを脱いでいる。そして、外に出ると同時に蜘蛛(アラネーオ)を召還する。

「お願い、アーちゃん」

俺も逆刃の劔を抜く。

「汝 雷公(らいこう)を 入手したのか、

珍しく蜘蛛(アラネーオ)が話し掛けてきた。

雷公……？

「もしかして、この逆刃の劔か？」

「その劔 伝説の四刀 雷公なり、

「……………」

一瞬、蜘蛛(アラネーオ)の言葉がわからなかった。

「おい、この劔が伝説の四刀だと？」

まさか、この劔が？

じいさんは、伝説の四刀は、全て揃っていないみたいな事を言ってたけど、まさかこんな別の世界にあるなんて思ってなかった。

「本当に伝説の四刀なのか？」

蜘蛛(アラネーオ)が嘘を言うはずもないし、間違える事もないだろう。だけど、どうにも信じられない。

「相違なし その劔 伝説の四刀なり、

「これが、伝説の四刀……」

改めて逆刃の劔を見る。

これが伝説の四刀なのか。

確かに思い返せば、あの刃物屋の店主は、誰にでも使えるわけじゃないというような事を言っていた。それに、あの静電気のようなもの。帯電しているわけじゃないのに、俺が触れようとしたら電気が走った。

じゃあ、やっぱりこれが……。

伝説の四刀——雷公なのか。

雷公は、譜遊(ふゆ)の四護(しご)が持つはずのものだったはずだ。だとすれば、この劔(つるぎ)こそが、俺が本来持つべきものだという事になる。

今まで風伯を相棒としてきたのに、ここで鞍替えしてしまっているものなんだろうか。だけど、ようやく本当の相棒に出会えたって事にもなるんだよな。

「今は、そんな事を悩んでる場合じゃないな」

とにかく、今手元にあるのはこの雷公だけだ。

この雷公の力を借りなければ、蟲(ベステート)と戦う事はできない。

「よろしく頼むぜ」

雷公をぎゅっと握り締める。

力を借りるぞ。

意気込んで列車の外に出たものの、肝心の蟲(ベステート)の姿が見えない。

「どこだ？ どこにいる？」

探していると、影が俺たちを覆う。

「上か？」

見上げると、そこには蟲(ベステート)らしい巨大なものがいた。

逆光でよく見えない。

……って、それよりも避けないと。

そのまま押し潰されるわけにはいかない。

列車から離れるように避ける。

その衝撃で土埃(つちぼこり)が舞う。

しばらくして、蟲(ベステート)の姿を確認する事ができた。

そいつは、細長い胴に細い四肢(しし)。頭部は細く、口部(こうぶ)は尖(とが)っていた。

俺たちが今まで見てきた蟲(ベステート)とは、大きく違う姿をしていた。もっとも、蟲(ベステート)に決まった姿はないみたいだけど。

蟲(ベステート)は俺たちを凝視しているようだった。

「とにかく、このままにしておくわけにはいかないんでな」

手に入れたばかりの伝説の四刀――雷公を振り上げて斬りかかる。

「くっ」

まだ使いこなせないってのもあるんだろうけど、全く効いていない。

「なんだよ、こいつ……」

ミカヅチさんに鍛えてもらって、少しはできるようになったと思ったんだけどな……。

って、よく考えたら、この劔は刃が反対だった。

普通の刀なら背になる方に刃がある。どうしてこんな構造なんだろう？ 人を相手にする時は、こっちの方がいいけどさ。

とにかく、普通に打ち込んだら峰打ちになる。

「そりゃ、効果なしってか」

だからといって、少し湾曲(わんきょく)しているので、逆さに斬るのは難しい。

雷公の力を引き出せれば、なんとかなるんだろうな。

さすがにまだそれはできそうにない。

だけど、これも伝説の四刀だ。蟲(ベステート)の相手はできるはず。

「蜘蛛(アラネーオ)、俺はこいつを手に入れたばかりで、まだ使えないみたいだ。すまないが、あまりサポートできそうにない」

「汝の心次第 雷公は必ず応える、

「……だよな。すまん。言い訳する前に、なんとかしてみないとな」

まず言い訳なんかするなんてな。

使いこなせなくても、こいつは俺を主と認めてくれた。だったら、俺が願えば一一信じれば応えてくれるはずだ。

「雷公、これから頼むぞ。一緒に蟲(ベステート)と戦おう」

なかなか戦いにくいな。

雷公に慣れないせいで、思うように体が動かない。

逆刃に慣れていない事もあるが、風伯よりも雷公は重い。気を抜くと、雷公に体を持っていかれそうになる。

それでも、ミカツチさんに鍛えてもらったお蔭で、少しは戦えている。

「蜘蛛(アラネーオ)、なんとか動きを止められないか」

「承知、

本当なら、俺が雷公の力でなんとかしたいが、今はまだできない。できるのは、雷公での物理攻撃だけだ。それだけだと、蟲(ベステート)の動きを止める事は不可能だ。

蜘蛛(アラネーオ)に頼んで、糸でなんとか動きを止めてもらおうとする……が、蟲(ベステート)は素早く移動して、その糸をかわしていく。

「くっ……。こいつ、かなり厄介だな」

動きが速く、蜘蛛(アラネーオ)の糸で動きを止める事ができない。やっぱり、雷公の力が必要なんだろうか。

もしここに風伯があれば、風で巻き上げて一気に地面に叩き落としてやるのに。

風伯を折ってしまった事が悔やまれる。

だからといって、今それを考えている場合じゃない。今あるもので、今できる事をしなければならぬ。

ここで蟲(ベステート)を仕留める。俺たちが封印すべき蟲(ベステート)には、逃げられっぱなしだし、もしこれがヒナゲシさんとリュウドウさんが倒すべき蟲(ベステート)なら、少しは恩返しができるかもしれないし。

「ファイ、頑張る」

後方からキヨカの声援が聞こえる。その声の後に、演奏も聞こえてきた。

いつもよりも音が高い気がする。

ふと見ると、いつものフルートじゃなくピッコロだった。

あいつの相棒も変わったって事か。

皮肉なのか運命なのか、自分でもよくわからない。

「雷公、俺に力を貸してくれ」

風伯のように力を引き出せるはずだ。しかし、雷公は応えてくれない。俺が未熟だって事だろう。

「しょうがない。思い切りさせてもらうぞ」

こうなりゃ、物理的に攻撃するしかない。とにかく、斬って斬って斬りまくるだけだ。

しかし、動きが速くなかなか命中しない。命中しても、ダメージは小さい。

こいつ、本当に強い。

俺だけだと、こいつの相手ができない。

ミカツチさんの剣戟があれば、もしかするとなんとかなるかもしれないのにな.....なんて、あるわけないよな。

とにかく、今は斬りまくるしかない。

斬りまくっていると、ふと上空が暗くなった。

なんだ？ 他にも蟲(ベステート)がいるのか？

そう思って見ると、上空に巨大な鳥が飛んでいた。

「な、なんだ.....あれ」

非常識な大きさの鳥だ。人が二、三人は乗れそうだ。

キヨカも気付いたらしく、演奏が止まっている。

「玄(くろ)の門番 鷹(ファルーコ)なり 支家の存在あり、

「玄の門番.....？ 鷹(ファルーコ).....？」

脳内に声と同時に文字も浮かぶ。クロってこういう文字なのか。変なところに感心してしまった

。つまり、蜘蛛(アラネーオ)の仲間って事になるのか。

でもって、支家があそこにいる？

支家って誰だ？

とにかく、援軍なんだよな。

助かった.....。

これで、この蟲(ベステート)をなんとかできるかもしれない。

鷹(ファルーコ)は急降下して、蟲(ベステート)に襲いかかる。

蟲(ベステート)はそれをギリギリかわす。

ちくしょう。あのスピードでもダメなのか。鷹(ファルーコ)のスピードは相当なものだった。本当に一瞬だった。それなのに、蟲(ベステート)には当たらなかった。

と、鷹(ファルーコ)の背中から誰かが降りる。あれが支家だろう。

もしかしたら、さっきのは攻撃じゃなくて、支家を降ろすためだったのか？

「ファイ様、シータ様、ご協力を願えますでしょうか」

支家の方は、蟲(ベステート)を睨んだまま声を掛けてくる。

ん？ 俺たちの名前を知っている？ まあ、それは仮面を見ればわかるんだけど。

だけど、それだけじゃなくて、俺たちはこの声を知っている。仮面を知っている。

「ミカツチさん！」

そこに立っていたのはミカツチさんだった。

ミカツチさんは、やっぱり詩稀(しき)の関係者だったんだ。

「ミカツチさん、どうしてここに.....」

キヨカが駆け寄ってくる。

「ファイ様、シータ様。この蟲(ベステート)は、わたしが滅すべきものなのです。ご協力頂けますか」

ミカツチさんは、蟲(ベステート)から目を逸らさない。

「もちろんですよ」

俺はミカツチさんの隣に並ぶ。

「ファイ様……その劔は……」

ミカツチさんが俺の方を見て訊く。

「ちょっと訳があって、風伯は使えないんです。その代わりに、この雷公で戦っているんです」

「雷公……」

その言葉を聞いた時、ミカツチさんの声色が変わった。

「それが雷公なのですか。譜遊の伝説の四刀……」

譜遊の名前を知っている。やっぱり間違いないだろう。

「それをファイ様が持っているという事は、ファイ様は譜遊の四護……。そんな……。では、風伯はどうして……」

ミカツチさんはなにかを呟いている。

「ミカツチさん、その話はこの国ではできないでしょ。とにかく、今はあの蟲(ベステート)をなんとかしましょう」

「……そうですね。失礼致しました」

よし、ミカツチさんという強力な助っ人が来てくれた。それに、門番の鷹(ファルーコ)もいる。

これなら、蟲(ベステート)に勝てるかもしれない。

「参ります」

ミカツチさんは、蟲(ベステート)に向かって斬りかかる。

すごい……。

ミカツチさんの剣戟は、俺と手合わせした時よりも数段速い。見事に蟲(ベステート)をとらえる

。脚を斬られた蟲(ベステート)は、体勢を崩した。そこを、鷹(ファルーコ)が空から攻撃する。

俺は、その連携に圧倒されていた。

「蜘蛛(アラネーオ)、俺たちも負けてられないな」

同意、

蜘蛛(アラネーオ)も同じ気持ちらしい。同じ門番が活躍しているのを見て、触発されるものがあったらしい。

「さて、やってやるか」

ミカツチさんの参戦もあって、徐々に蟲(ベステート)を追い詰めていっている気はする。

しかし、有効な攻撃があまりないのも事実だ。

当たってはいるものの、蟲(ベステート)は意に介していないように思える。

蜘蛛(アラネーオ)の糸は蟲(ベステート)に悉く避けられ、動きを止められていない。

当たっている攻撃は、ほとんどがミカツチさんのものだ。

むしろ、ミカツチさんしか当てる事ができていない。鷹(ファルーコ)の攻撃も、半分以上は空振りに終わっている。

やっぱり、こいつは速すぎる。

体をくねくねとさせて避けられてしまうのも厄介だ。

せっかくの共闘なのに、俺たちは役に立てていない。

ミカツチさんは、なにかに取り憑(つ)かれたように刀を振り続ける。

いったい、なにがあったんだ？

二人と蜘蛛(アラネーオ)と鷹(ファルーコ)で力を合わせても、この蟲(ベステート)を仕留める事ができないってのはどうしてだ。

俺だけならともかく、ミカツチさんがいるのに。

やっぱり、俺が雷公の力を引き出せていないからなのか。

「くっ……」

やばい。腕に力が入らない。

慣れない劔に重さも加わり、腕が限界だ。腕が千切(ちぎ)れてしまいそうだ。

「ファイ様、大丈夫ですか」

「すみません……。腕が……」

もうダメだ。

雷公を地面に刺し、なんとか体を支える。

「ファイ様、少し休んでいて下さい。この蟲(ベステート)は、わたしが滅しなければならぬものです。わたしが仇をとらねばならぬのです」

ミカツチさんは、果敢(かかん)にも蟲(ベステート)に立ち向かい続ける。

それにしても、仇って……。

「ファイ、大丈夫？」

キヨカが駆け寄ってくる。

「すまない、シータ。限界だ……」

情けないけど、俺はここまでだ。これ以上は戦えそうにない。

「ファイ……」

「本当にすまない」

「ううん、すごかったよ。ミカツチさんはもっとすごいけどね」

「そうだよな……」

ミカツチさんは、まだ戦えている。俺なんか、やっぱりミカツチさんの足下にも及ばないんだ

。

「でも、ファイだってすごかったんだよ。後ろで見てたらわかるよ」

「サンキュな」

慰めだとしても嬉しい。

しかし、こうして戦線離脱してみると、ミカツチさんの動きがよくわかる。

あの人の動きには、とてもじゃないが敵わない。刀捌(さば)きが絶妙なのはもとより、そのスピードも並じゃない。それでも、蟲(ベステート)の相手にはなっていない。

やっぱり、伝説の四刀じゃないとダメなのか。

もし、ミカツチさんが伝説の四刀を使えば……。

風伯ならば、ミカツチさんの力を発揮できただろう。あの刀は、スピード重視というか、スピードを求めている刀だった。

雷公はスピードよりも力強さを求めている感じがする。ミカツチさんのスタイルには合わないだろう。

「くそっ……。俺がもっと戦えれば……」

体力の無さを嘆(なげ)くしかできない。

もっと鍛えないと。

さすがに、大きさが違いすぎる武器は、扱いづらい。重さも倍くらいだしな。

俺がこんなだから、雷公は応えてくれないんだろうな。

「ファイ……大丈夫？ どこか痛いの？」

「えっ？ いや、別に……」

別に痛い箇所なんかない。怪我なんかしてないしな。

「泣いてるよ」

「……………」

頬を触ると、確かに濡れていた。

「……あれ？ 俺、どうして泣いてるんだ？」

それを自覚すると、目頭が熱くなっている事に気付いた。確かに俺の涙だ。

「本当に大丈夫なの？」

「ああ、俺はなんでもない。……本当に、どうして涙なんか……」

キヨカはずっと心配してくれている。

だけど、俺自身もどうして泣いているのかわからない。

確かに泣きたいくらい情けないな……とは思ってたけど。それでも、本当に泣くなんて……。

「それよりも、ミカツチさんは大丈夫なのか？」

「うん。大丈夫じゃないかもだけど、すごいよ。なんだろう、鬼気迫る感じかな。自棄(やけ)になっているというか、自分の事を全く気にしていない感じがするんだ」

そう言われて、ミカツチさんの姿を追う。

……確かにそうだ。

ミカツチさんの戦い方は、自分の体を気遣っていない。どうなっても構わないという感じがする。

とにかく、目の前の蟲(ベステート)を倒そうとだけしている感じだ。それさえできれば、後の事はどうでもいいだろう。

そのミカツチさんの戦い方のせいか、蜘蛛(アラネーオ)と鷹(ファルーコ)は様子を見ている感じがする。

「なあ、蜘蛛(アラネーオ)。この蟲(ベステート)をどう思う？」

蜘蛛(アラネーオ)に話し掛ける。

「厄介なり、」

「それは同感だ。ミカツチさんはどう思う？」

「善戦している　しかし　無謀なり、

「資格者(ティトーロン)は、四護の仇をとろうと必死なのだ、
知らない声が聞こえた。もしかして、鷹(ファルーコ)なのか？

「もしかして鷹(ファルーコ)なのか？」

「我は玄の門番、鷹(ファルーコ)なり。譜遊の四護よ、汝にのみ話をする。譜遊の四護よ、私の資格者(ティトーロン)を救ってはもらえないだろうか、

俺だけに話？　つまり、キヨカには聞こえていないって事か。

「資格者(ティトーロン)ってのはミカツチさんだよな。俺がミカツチさんを救う？」

協力とかじゃなくて、救う？　どういう事だ？

「そうだ。彼(か)の蟲(ベステート)を滅してはもらえないだろうか、

「あの蟲(ベステート)を……」

そりゃ、俺だって倒したいけど、今の俺じゃ……。

「譜遊の四護よ、雷公を我に、

鷹(ファルーコ)が近くに降りてくる。

「雷公を……？」

よくわからないが、雷公を鷹(ファルーコ)に預ける。鷹(ファルーコ)は雷公を銜(くわ)える。

そうしてから、俺に雷公を返す。

「譜遊の四護よ、我に乗れ、

「……ああ、わかった」

言われるまま、鷹(ファルーコ)の背に乗る。

「譜遊の四護よ、私の速さを使い蟲(ベステート)を斬り裂け、

「わかった」

どうやら、鷹(ファルーコ)が協力してくれるらしい。鷹(ファルーコ)の力を借りて、なんとかできるかもしれない。

鷹(ファルーコ)は大空に舞い上がる。

すごい……。空からってこんな気分なんだ。

「資格者(ティトーロン)よ、蟲(ベステート)より離れよ、

鷹(ファルーコ)の声に反応したミカツチさんは、悔しそうにしつつも距離をとる。

それを確認した刹那(せつな)、鷹(ファルーコ)は真っ直ぐ蟲(ベステート)に突っ込んでいく。

俺は雷公を構える。刹那、刀身が帯電した。バチバチと弾ける音がする。

「これって……」

「斬り裂け、

俺が雷公に感心している暇もなく、蟲(ベステート)に向かって振り下ろす。

鷹(ファルーコ)の勢いも加わり、蟲(ベステート)を一気に斬り裂く。

しかし、蟲(ベステート)は寸前で間合いをとり、完全には届かなかった。それでも、今までにない、かなりの深手を負わせる事ができた。

傷を負った蟲(ベステート)は、その姿を消してしまった。

「勝ったわけじゃないんだよな」

蟲(ベステート)は時空(とき)を移動した様だ、

鷹(ファルーコ)が答える。

「時空(とき)を移動……」

つまり、この世界にはもういないって事か。

資格者(ティトーロン)の願い、成就されず、

その声が聞こえたのか、聞こえなくても感じ取ったのだろう、ミカツチさんは地面に座り込んでしまう。

こんなミカツチさんを見るのは初めてだ。

なんだろう。強い姿しか見ていなかった。こんなに弱い一面もあったんだと思わされる。

そりゃ、人間だもんな。ミカツチさんだって、普通の女の人だ。そんな事わかりきっているのに、それでも驚いてしまう。

「ファイ、お疲れ様」

地面に戻ってくると安心する。鷹(ファルーコ)に乗るのは気持ちよかったけど、怖くもあった。

「ああ。結局、逃がしちまったけどな」

蟲(ベステート)を倒す事はできなかった。

捕らえる事すらできず、結果として逃がしてしまった。それも、別の時空(とき)に。

深手を負わせられたものの、その傷が癒える頃までに、再び捕捉する事はできないだろう。傷が癒えれば、蟲(ベステート)は暴れ出す。先延ばしにできただけだ。

それに加えて、あの蟲(ベステート)は俺たちが封印している蟲(ベステート)じゃない。つまり、蜘蛛(アラネーオ)があつた蟲(ベステート)を追って時空(とき)を移動させる事はできない。

譜遊の四護よ、協力に感謝する。求める蟲(ベステート)はいなくなった。我は再び、資格者(ティトーロン)の中で眠ろう、

そう言い残し、鷹(ファルーコ)は姿を消した。

「ファイ、ミカツチさんは……」

「……………」

どう声を掛ければいいのか。なにも言えない。なにもできない。

鷹(ファルーコ)が教えてくれた事は、ミカツチさんは譜遊の支家だという事。そして、あの蟲(ベステート)はミカツチさんにとって仇だという事。

つまり、あの蟲(ベステート)に大切な人の命を奪われたという事だろう。それはおそらく――これは想像でしかないが、ミカツチさんと一緒に旅をしていた相手――譜遊の四護だろう。

……って、ちょっと待てよ。譜遊の四護って事は、俺のご先祖様なのか？ ここで命を落としていたら直接の子孫じゃないかもだけど、ご先祖様って事には変わりないよな。なんとなく、俺の子孫って感じはしないから、やっぱりご先祖様だよな。

おいおい、だったらあの蟲(ベステート)は俺にとっても仇なんじゃないのか？

……だけど、逃がしたわけだよな。

こうなりゃ、どこかの世界で会った時は、全力で倒してやる。今度は逃がさない。

「ファイ……なんだかやる気になってるね」

蟲(ベステート)の姿がなくなった事で、列車は再び走り始めた。

幸いにも、車両や線路には被害がなかった。これで、なんとか幽谷までは行けるだろう。

もちろん、フェイズさんとティアナさんも無事だ。

たださっきまでと違うのは、俺たちと一緒にミカツチさんも乗っているという事だ。

あのまま魂が抜けてしまったようになってしまったミカツチさんを車内に運び、一緒に幽谷まで向かう事にした。まさか、あのままにしておくわけにはいかないからな。

ミカツチさんは今、座席に横になっている。

列車は無事に走り続けた。

ミカツチさんはまだ目を覚まさない。キヨカとティアナさんが、ずっと看病を続けてくれている。

フェイズさんと俺は、黙々とマスコットを作っていた。

なにもできない事を、なにかで紛らわせたかったんだ。

心を無にするように、ひたすら作り続けていると、次々と出来上がっていく。

お蔭で、時間が過ぎるのが早かった。食事すら忘れて没頭してしまっていた。

目的の場所に到着したのは、出発して四日目だった。

その頃には、ミカツチさんも目を覚ました。

その事に、キヨカは泣きながら喜んで、ミカツチさんに力一杯抱きついていていた。

心の歌を奏でて 一仮面の国一 ㊥の㊦

<http://p.booklog.jp/book/102311>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102311>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102311>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ